

長野県植物研究者伝 5

白 沢 保 美 抄 伝

T. Maruyama: Biography of Dr. Homi Shirasawa

丸 山 利 雄

長野県出身の植物研究者で、主として中央において日本の林学界・林業界の明治後半から昭和前半にかけての中心的指導者として、多くの業績を残されたのは、白沢保美博士(1868-1947)である。

その履歴の要は、次の通りである。

1868(明治元年)8月18日、南安曇郡明盛村(現在の三郷村)一日市場に生れた。現在の白沢和美氏(松商学園高校教諭)宅がその生家である。

白沢家は代々医家であり、少年の頃から本草学に興味があったという。小学校卒業後は、地方の漢学塾で漢学を学んだ。

1885(明治18年)17才、大阪の米国系ミッションスクール大阪英和学舎に入学、主として英語を学ぶ。

1887(明治20年)19才、東京農林学校入学。この学校は3年で卒業予定の所、東京帝国大学農科大学となり、その予科学生となる。1891(明治24年)23才、農科大学専科卒業、続いて本科に在学。1894(明治27年)26才、農科大学林学科卒業、続いて大学院入学。森林植物学専攻。大学院在学中に山林局の嘱託により日本の森林樹木誌原図調製のため日本森林植物の調査研究をする。

1896(明治29年)28才、大日本山林会評議員。

1897(明治30年)29才、東京大学農科大学講師。農商務省技師を兼ね、山林局に勤務する。この年足尾銅山鉱毒事件の調査委員も委嘱される。

1900(明治33年)32才、ヨーロッパへ出張を命ぜられ、パリにおける万国博と万国学芸会議中の林業万国会議に委員として出席する。

1901(明治34年)33才、森林植物学研究のため、ドイツ・スイスへ留学。この年フランス共和国アカデミー記章をうく。

1902(明治35年)34才、5月帰国、林業講習、博覧会事務、樹木図調製事務、試験苗圃、森林参考品事務等を委嘱される。

1903(明治36年)35才、「クスノキの樹体内における樟脳の生成と分布(独文)」の学位論文で林学博士となる。第5回国産勲業博覧会審査官を命ぜられる。

1905(明治38年)37才、神戸樟脳事務局嘱託となる。英国森林会名誉会員となる。

1907(明治40年)39才、東京勲業博覧会審査官を命ぜられ、大蔵省専売局嘱託となる。

1908(明治41年)山林局林業試験所長となる。

1910(明治43年)ヨーロッパ各国へ出張を命ぜられ、オーストリア樹木協会名誉通信員となる。

1913(大正2年)45才、再び林業試験所長となり、この職に昭和7年(1932)まで在職。

1914(大正3年)46才、東京大正博覧会審査官を命ぜられる。

1915(大正4年)47才、支那に出張を命ぜられ、青島におけるドイツの森林経営を調査する。

1919(大正8年)51才、シベリア・北満の山林調査のため出張。

1920(大正9年)52才、大日本山林会監事。

1921(大正10年)53才、日本林学会長、昭和19年まで会長。

1922(大正11年)54才、平和記念東京博覧会第7部審査部長、東京工廠嘱託、東京帝国大学航空研究所嘱託。

1926(大正15年)58才、京都帝国大学農学部講師兼任、この年ハバロフスクへ出張。

1927(昭和2年)59才、東京帝国大学農学部講師兼任。

1928(昭和3年)60才、大日本山林会理事。

1930(昭和5年)62才、日本農学会副会長。

1932(昭和7年)64才、願いにより本官(林業試験所長)並びに兼官を免ぜられる。帝国森林会評議員並びに監事となる。

1934(昭和9年)66才、財団法人林学会理事長。

1935(昭和10年)67才、日本農学会長。

1936(昭和11年)68才、帝国森林会理事となる。

1939(昭和14年)71才、興農学園理事長となる。

1941(昭和16年)73才、財団法人粗食研究会理事長。

1946(昭和21年)78才、貴族院議員。

1947(昭和22年)79才、12月20日、東京下目黒の自宅で逝去。

博士の論文著書等は極めて多いが、植物分類に関する主なものは、次のようである。

1. 落葉広葉樹冬期の状態(独文)1895(明治28年)

農科大学学術報告 2 巻 5 号。これは、日本産広葉樹 260 余種の冬芽の状態について精細な記載と図説があり、その形状によって比較分類して検索表をつくり、落葉時においても樹種の区別ができるようになっている。

2. 新種、日本産トガサワラについて、1895 (明治 28 年) 植物学雑誌。
3. 新種の日本産針葉樹、1895 (明治 28 年) 大日本山林会報、156 号。
4. 日本産 *Tilia* について (独文) 1900 (明治 33 年) 農科大学学術報告 4 巻 2 号。
5. クスノキの樹体内における樟腦の生成と分布、(独文) 1903 (明治 36 年) 農科大学学術報告 5 巻 3 号、学位論文。
6. 日本森林樹木図譜、上巻 (1905 年発行)、下巻 (1910 年発行)。これらは、1894 年 (明治 27 年) から 1899 年 (明治 32 年) にかけて調査した日本の森林樹木 320 種について記載し、原色図をそえて印刷されている。

なおこの本は、図を白黒にし、図の大きさを $\frac{2}{3}$ とし、説明文を加えて上巻は 1911 年 (明治 44 年)、下巻は 1912 年 (大正元年) に複製されている。この複製には、長野県出身の林業試験所技師小山光男 (1885-1935) 氏の協力が大であったという。

7. 日本竹類図譜 (1912 年発行)。これは、1902 年 (明治 35 年) から 10 年間の調査の結果、日本産主要竹類 39 種について記載したものである。
8. 日本産唐桧及び縦属の新種 (英文) アメリカの園芸雑誌に掲載、1925 (大正 14 年)。

博士並びに小山光男氏の発見や命名した植物には、次のようなものがある。

オオバボダイジュ *Tilia maximowicziana* Shirasawa この植物については、前記「日本森林樹木図譜」に次のようにその分布地が記載されている。「東北地方より北海道にわたり、山腹または溪谷に生ず。奥羽地方ではヤマハンノキ・ヤマナラシ・ミズナラなどと、北海道ではシナノキ・カツラ・ミズナラ・ハルニレ・ホオノキなどと混生する」と。現在この植物は、北海道と本州は奥羽・北関東・北陸・長野県 (南信を除く)・岐阜県北部に分布することが知られている。

ヘラノキ *Tilia kiusiana* Makino et Shirasawa この植物については、「日本森林樹木図譜」には次のように記載されている。「九州に限り産し、日向・豊後・筑後・肥後などの海拔 300 尺-2000 尺の間にわたりて、コナラ・クヌギ・クリなどと混生

する」と。現在この植物は、本州 (奈良・丹波・山口)・四国・九州に分布することが知られている。

トガサワラ *Pseudotsuga japonica* Shirasawa この植物は、1895 年前記の山林調査の折、和歌山県・奈良県・三重県の県境付近の山岳で発見されたもので、この地域の外は、その後四国にも分布することが知られている。

ヤツガタケトウヒ *Picea koyamae* Shirasawa この植物は、小山光男氏が 1913 年八ヶ岳の西岳で発見したもので、八ヶ岳の特産である。

シラネマツハダ *Picea bicolor* Mayr. var. *reflexa* Shirasawa et Koyama この植物は、イラモミ (一名マツハダ) の変種で、南アルプス特産のものである。

ヒメマツハダ *Picea shirasawae* Hayashi この植物は、八ヶ岳と仙丈岳だけに分布するこの地域特産のもので、はじめは前種と同じくイラモミの 1 変種として *Picea bicolor* Mayr. var. *acicularis* Shirasawa et Koyama と命名されたが、その後前記のように林弥栄博士によって種として独立すべきものと改められた。ヤツガタケトウヒと同じ時、同じ山で小山光男氏によって発見された。

アオシラベ (1 名アオシラビソ) *Abies veitchii* Lindl. var. *olivacea* Shirasawa この植物は、シラベ (1 名シラビソ) の変種で、本州の関東・中部・近畿地方に分布するものである。

なお、博士の名を記念して、小泉源一博士によって命名されたものに、オオイタヤメイゲツ *Acer shirasawanum* Koidz. がある。

博士はこのように日本の林学界・林業界への貢献が大であったばかりでなく、青少年の教育にも熱心で、居住地の目黒小学校の児童保護会長を数十年もつとめたといい、郷里の三郷小学校にも博士の記念文庫があり、博士愛唱の「心に太陽をもて」の詩碑もあるといい、また信濃夏季大学の評議員でもあった。

参考文献

白沢保美「松本親睦会雑誌」記事 (有賀義人先生よりの書翰)

南安曇郡誌第 3 巻下

近代日本の科学者 第 2 巻 (堀川豊永編集) 中の

白沢保美伝 (執筆分担者 佐藤敬二)

牧野富太郎・根本莞爾共著 日本植物総覧

大井次三郎著 日本植物誌

杉本順一著 新日本樹木総検索誌

日本森林樹木図譜 上巻 下巻